

2007年10月5日

淀川水系流域委員会 様

宇治・世界遺産を守る会
藪田秀雄**第63回委員会審議資料2-2「天ヶ瀬ダム再開発事業」に関する質問****質問1**

天ヶ瀬ダム再開発事業の $1,500 \text{ m}^3/\text{s}$ 放流能力増強の原因である琵琶湖後期放流の $1,500 \text{ m}^3/\text{s}$ の根拠は何か。

淀川水系流域委員会は「淀川水系5ダムについての調査結果についての意見書」（平成17年12月22日）で「4-3-2 天ヶ瀬ダムの放流量の増大（1）放流能力の増大」において「河川管理者が05年7月の『調査検討』で示している天ヶ瀬ダムの洪水調節制限水位での $1,500 \text{ m}^3/\text{秒}$ への放流能力の増大は、71年12月に策定された淀川水系工事实施基本計画に示されたものを踏襲したもので、明確な論理的根拠を持っているとはいえない」とのべている。明確な説明を求めたい。

質問2

71年12月に策定された淀川水系工事实施基本計画で宇治地点の計画高水流量は $1,500 \text{ m}^3/\text{s}$ である。これは宇治橋上流域において2日間で272mmの降雨があった場合、 $2,800 \text{ m}^3/\text{s}$ の洪水流量を天ヶ瀬ダムと大戸川ダムで洪水調節して、天ヶ瀬ダム地点で $1,200 \text{ m}^3/\text{s}$ にして放流、天ヶ瀬ダム地点から宇治橋付近までの流域で $300 \text{ m}^3/\text{s}$ の洪水を想定し、宇治地点の計画高水流量 $1,500 \text{ m}^3/\text{s}$ としたと説明されてきた。これは宇治川を $1500 \text{ m}^3/\text{s}$ 流下能力の河道に改修して、それを琵琶湖後期放流に利用しようとする計画である。

琵琶湖後期放流の放流量 $1500 \text{ m}^3/\text{s}$ の数値は下流の宇治川の流下能力からつくられた数値であると考えられる。したがって宇治川の治水と河川環境の保全の観点から塔の島地区の流下能力を $1,200 \text{ m}^3/\text{s}$ とした場合には琵琶湖後期放流は $1,200 \text{ m}^3/\text{s}$ となるべきものとするがどうか。

質問3

第63回委員会審議資料2-2「天ヶ瀬ダム再開発事業」パワーポイント9 「事業の概要（目的）」で「制限水位（E.L. +72.0m）において、天ヶ瀬ダム最大放流能力 $900 \text{ m}^3/\text{s}$ を発電最低水位（E.L. +67.1m）において、 $1,500 \text{ m}^3/\text{s}$ に増強する。」とある。

これまで、琵琶湖後期放流時においても水位を洪水期制限水位以下に保つためには、「洪水期制限水位において $1,500 \text{ m}^3/\text{s}$ の放流能力を確保する必要がある。」（天ヶ瀬ダム再開発の調査検討（とりまとめ）平成17年7月21日 近畿地方整備局）として

いた。制限水位 (E. L. 72. 0m) から発電最低水位 (E. L. 67. 1m) に変更する理由は何か。

質問 4

原案 p 62 でトンネル式放流施設について「計画放流量 $600 \text{ m}^3/\text{s}$ (E. L. 72. 0m)」とある。質問 2 に関わって説明されたい。

質問 5

第 63 回委員会審議資料 2-2 「天ヶ瀬ダム再開発事業」パワーポイント 10 で堆砂容量が現況 $6,000 \text{ 千 m}^3$ から事業後 $6,280 \text{ m}^3$ の意味を説明されたい。

天ヶ瀬ダムの堆砂率 (計画) 43% に対して堆砂率 (実績) 72% (第 57 回委員会審議資料 4-2 p 67) は淀川水系の他のダムに比べて高いと見えるがその原因は何か。

質問 6

昭和 28 年台風 13 号洪水時を想定した場合に天ヶ瀬ダム湖へ流入する瀬田川、大戸川、宇治田原川その他の各支川の流量はいくらか。天ヶ瀬ダムからの放流量、志津川、白川、関電宇治発電所放水路、戦川、弥陀次郎川など各支川の流量はいくらか。流量配分図を示して詳細に説明されたい。

また、琵琶湖・洗堰、天ヶ瀬ダム地点、宇治地点の洪水ハイドログラフを明示されたい。

質問 7

琵琶湖後期放流時の瀬田川、大戸川、宇治田原川、その他の各支川の流量はいくらか。天ヶ瀬ダムの放流量、志津川、白川、宇治発電所放水路などの流量はいくらか。流量配分図を示して、詳細に説明されたい。

琵琶湖・洗堰、天ヶ瀬ダム地点、宇治地点の洪水ハイドログラフを明示されたい。

質問 8

宇治川の現況の宇治地点の流下能力 $890 \text{ m}^3/\text{s}$ 、堤防満杯流量 $890 \text{ m}^3/\text{s}$ (第 61 回審議資料 1-2-3 p 5 現況施設 (現況河道、洪水調節施設現況) とある。ここで言う $890 \text{ m}^3/\text{s}$ の水位を河川断面図に示して説明されたい。

同様に 宇治川の流下能力 $1,500 \text{ m}^3/\text{s}$ 、堤防満杯流量 $1,900 \text{ m}^3/\text{s}$ (第 61 回審議資料 1-2-3 p 8、p 9 の表) とあるが、どこの地点のことなのか場所と河川横断面図に水位を示して詳細に説明されたい。(O. P. B. m を明示されたい)

質問 8

天ヶ瀬ダム地点から下流の宇治川水位縦断面図 (現況河道、整備後河道、昭和 28 年 13 号洪水流下時、琵琶湖後期放流流下時、最深河床高、平均河床高、堤防高さ、流入河川) を示されたい。(O. P. B. m 明示されたい)

質問 9

下記の各地点における、昭和 28 年台風 13 号洪水および琵琶湖後期放流時の最高水位および平水位、低水位を河川横断図（現況、整備後）に示し、説明されたい。（O. P. B. m を明示されたい）

白虹橋・志津川合流地点直下、天ヶ瀬吊橋、白川浜・白川合流点直下、槇尾山水位観測点、亀石地点、朝霧橋上流 51.2kp、宇治橋上流、関電吐水路合流点上流、宇治川大橋、隠元橋地点など。

質問 10

琵琶湖後期放流時、宇治川が高水位になるために、宇治川に流入する宇治市街地の各河川に支障が発生する可能性について

質問 11

第 63 回委員会（H19.9.26）審議資料 2-2「天ヶ瀬ダム再開発事業」のパワーポイント 11「事業の効果（琵琶湖治水）」についての質問

	現況		整備後	
琵琶湖最高水位（B.S.L.）	+0.90m		+0.71m	最高水位が約 19cm 低減
氾濫注意水（B.S.L.+0.70m）を越える時間	120 時間		15 時間	氾濫注意水位を越える時間が 105 時間短縮
浸水戸数	15 戸		0 戸	
浸水農地面積	1800ha		970ha	

質問 11-1 氾濫注意水位（B. S. L. +0.70m）は何時、何によって定められたのか。

質問 11-2 これまで琵琶湖沿岸の浸水の評価は、B. S. L. +0.30m を越える時間でもって評価されていたが、今回氾濫注意水位でもって評価しているのはなぜか。評価の基準を変えた理由はなにか。

質問 11-3 「事業の効果（琵琶湖治水）」で、「琵琶湖最高水位：現況 B. S. L. +0.90m、整備後 B. S. L. 0.71m。最高水位が約 19cm 下がる。」としている。第 42 回委員会審議資料 1・6・3、第 3 回天ヶ瀬ダムワーク（2）資料 3 などで、昭和 36 年 6 月洪水シュミレーションで、琵琶湖最高水位 現況 B. S. L. +0.98m、整備後 B. S. L. +0.82m としている。これらと水位数値が異なっている理由は何か。

	琵琶湖最高水位（B.S.L.）		浸水戸数	
	現況	整備後	現況	整備後
①63 回委員会（H19.9.26）審議資料 2-2	+0.90m	+0.71m	15 戸	0 戸

『天ヶ瀬ダム再開発事業』H19年9月26日国土交通省近畿地方整備局				
②42回委員会（H17.7.21）審議資料1-6-3『天ヶ瀬ダム再開発の調査検討（とりまとめ）』H17年7月21日国土交通省近畿地方整備局	+0.98m 現況・現 行操作	+0.82m 整備後・ 現行操作	18戸 床下浸水	5戸 床下浸水
③第3回天ヶ瀬ダムワーク（2）資料3『琵琶湖沿岸の浸水被害について』H16年11月28日 琵琶湖河川事務所	+0.98m	+0.82m	18戸 床下浸水	5戸 床下浸水
④第4回ダムWG(H16.8.19)天ヶ瀬ダム再開発の効果<参考資料> 平16年8月19日近畿地方整備局			7戸 床下浸水	0戸
④委員会第2回ダムワーキング資料『天ヶ瀬ダム再開発計画に関する調査検討(中間報告)』H16年7月18日 琵琶湖河川事務所	+0.98m	+0.82m	7戸	0戸
⑤天ヶ瀬ダム再開発対話討論会説明資料 平成16年2月8日	+0.98m	+0.82m	11戸	2戸
⑤第20回委員会（H15.4.21）配布資料『天ヶ瀬ダム再開発計画の見直し案説明資料』H15年4月21日近畿地方整備局	+0.98m	+0.82m	11戸	

質問 11-4 「事業の効果（琵琶湖治水）」で、浸水戸数 現況 15 戸、整備後 0 戸としている。第 42 回委員会（H17.7.21）審議資料 1-6-3 天ヶ瀬ダム再開発の調査検討結果（まとめ）、第 3 回天ヶ瀬ダムワーク（2）資料 3 の昭和 36 年 6 月洪水のシュミレーションで、浸水戸数 現況 18 戸、整備後 5 戸、また第 4 回ダム WG(H16.8.19)「天ヶ瀬ダム再開発の効果<参考資料> H16 年 8 月 19 日近畿地方整備局」で浸水戸数 現況 7 戸、整備後 0 戸としている。これらと浸水戸数の数値が異なっている理由は何か。

質問 11-5 「事業の効果（琵琶湖治水）」で、浸水農地面積について、現況 1800ha、整備後 970ha としている。「第 3 回天ヶ瀬ダムワーク資料」、「第 4 回、第 2 回ダムワーキング資料」、「第 4 回ダム WG(H16.8.19)天ヶ瀬ダム再開発の効果<参考資料> H16 年 8 月 19 日近畿地方整備局」の昭和 36 年 6 月洪水のシュミレーションで、浸水農地 現況 1590ha、1600ha、整備後 900ha としている。これらと浸水農地の数値が異なっている理由は何か。

	浸水面積	
	現況	整備後
①63回委員会（H19.9.26）審議資料 2-2	浸水農地 1800ha	970ha
②42回委員会（H17.7.21）審議資料 1-6-3 天ヶ瀬ダム再開発の調査結果（とりまとめ）浸水被害の予測（農地被害）	農地被害 30 cm 36 時間以上浸水約 220ha	内 30 cm 36 時間以上浸 水約 65ha

	(内水排水区域において30cm36時間以上浸水する水田面積14ha)	(内水排水区域において30cm36時間以上浸水する水田面積2.3ha)
③第3回天ヶ瀬ダムワーク(2)資料3『琵琶湖沿岸の浸水被害について』H16年11月28日 琵琶湖河川事務所	水田 約1550ha (内30cm36時間以上浸水約220ha)	水田 約870ha (内30cm36時間以上浸水約65ha)
	畑 約40ha	畑 約30ha
第4回ダムWG(H16.8.19)天ヶ瀬ダム再開発の効果<参考資料> H16年8月19日近畿地方整備局	浸水田畑1600ha (内畑50ha)	浸水田畑900ha (内畑30ha)
④第2回ダムワーキング(H16.7.18)琵琶湖周辺の浸水状況シュミレーション結果	水田 約1550ha 畑 約50ha	水田 約870ha 畑 約30ha
⑤天ヶ瀬ダム再開発対話討論会説明資料 H16年2月8日	2300ha	1300ha
⑥淀川水系河川整備計画意見交換会(H15.7.6)配布資料—1「天ヶ瀬ダム再開発計画についての説明資料」	3533ha	2301ha
⑦第20回委員会(H15.4.21)配布資料『天ヶ瀬ダム再開発計画の見直し案説明資料』H15年4月21日近畿地方整備局の琵琶湖沿岸の浸水面積	3533ha	△1232ha

質問11-6 平成7年5月洪水の琵琶湖最高水位 B. S. L. +0.93m、浸水戸数7戸、浸水面積約750haであるのに対して、今回の昭和36年6月洪水シュミレーションの結果で琵琶湖最高水位 B. S. L. +0.90m、浸水戸数15戸、浸水農地面積1800haである。最高水位が低い方が浸水戸数も浸水面積も多い理由について説明されたい。

	昭和36年6月洪水シュミレーション		平成7年5月洪水
	現況	整備後	
琵琶湖最高水位 (B.S.L.)	+0.90m	+0.71m	琵琶湖最高水位 B.S.L.+0.93m
氾濫注意水 (B.S.L.+0.70m) を越える時間	120時間	15時間	
	氾濫注意水位を越える時間が105時間短縮		
浸水戸数	15戸	0戸	浸水戸数 7戸 (床下)
浸水農地面積	1800ha	970ha	浸水面積 約750ha

質問11

第63回委員会審議資料2-2「天ヶ瀬ダム再開発事業」パワーポイント3 「事業の必要性(琵琶湖治水)」の浸水被害の状況(平成7年5月洪水)で「平成7年5月13日撮影 撮影日6時の琵琶湖水位 B. S. L. +0.73m」と記述している。平成7年5月洪水の琵琶湖最高水位は B. S. L. +0.93mである。ここでわざわざ+0.73mと書いている意

図は何か。

質問 12

瀬田川洗堰の全閉を行わない、洪水時も洗堰設置前と同程度の流量を流下させるとある。洗堰設置前と同程度とは具体的に何 m^3/s なのかという質問に対して $93 \text{ m}^3/\text{s}$ という回答が出されている。

これは河川整備基本方針検討小委員会へ提出の資料「①—2 瀬田川洗堰の取り扱い」で「洗堰設置以前 ・瀬田川洗堰の流下能力は、B. S. L. = $\pm 0 \text{ m}$ で $50 \text{ m}^3/\text{s}$ 程度（淀川百年史より）」はもとより、第 57 回委員会審議資料 4-2 「淀川の現状と課題」パワーポイント 44 「瀬田川改修、洗堰の設置による琵琶湖水位の低下」で、洗堰設置（明治 38 年）前の瀬田川流下能力は $50 \text{ m}^3/\text{s}$ であり、第 58 回委員会審議資料 4 p 31 下段で「瀬田川の流下能力：B. S. L. 0 m で毎秒 50 m^3 。旧洗堰の設置（明治 38 年）と瀬田川浚渫（瀬田川の流下能力：B. S. L. 0 m で毎秒 200 m^3 ）」としていることと矛盾する。再度説明されたい。

質問 13

洪水時に瀬田川洗堰の全閉を行わず、 $50 \text{ m}^3/\text{s}$ あるいは $93 \text{ m}^3/\text{s}$ を流下させた場合の琵琶湖治水・琵琶湖水位への効果について資料を出して詳細に説明されたい。

質問 14

洪水時瀬田川洗堰 $50 \sim 93 \text{ m}^3/\text{s}$ 放流 + 琵琶湖後期放流 $1,500 \text{ m}^3/\text{s}$ の場合および洪水時瀬田川洗堰 $50 \sim 93 \text{ m}^3/\text{s}$ 放流 + 琵琶湖後期放流 $1,200 \text{ m}^3/\text{s}$ の場合の琵琶湖最高水位、浸水戸数、浸水農地面積はいくらなのか、詳細に説明されたい。

質問 15

琵琶湖後期放流時の洗堰の放流量と大戸川の流量の関係について説明されたい。

質問 16

琵琶湖開発事業前と開発事業後で、琵琶湖計画高水位 B. S. L. + 0.80 m を B. S. L. + 1.40 m に変えた理由を説明されたい。（第 57 回委員会審議資料 4 - 2 p 49、第 58 回委員会審議資料 4 p 5）。

質問 17

琵琶湖沿岸の浸水被害を軽減するための流域対応（土地利用の規制・誘導など）について委員会から意見が出されていたが、具体的のどのように検討され、どのように進行しているのか説明してください。